金澤町家塾「城下町金沢の成り立ちと町並み」

日　時　2025 年 3 月 8 日（土）10 時～11 時半
会　場　金澤町家情報館／オンライン配信
講　師　増田　達男（金沢工業大学名誉教授）
聞き手　川上　光彦（NPO 法人金澤町家研究会理事長）

【前半】

寛文七年金沢図(1667 年)の前には、しっかりとした地図は無く、それまでの城下町形成過程は史料で捉える必要があります。

金沢御堂の頃は、御堂の西南に西町や南町などの寺内町が並び、周辺には村々があり、田や畑、農地が取り巻いていました。町外れには砦があり、現在の小立野もまだ城下町には入っておらず、山崎山と呼ばれた馬の飼料を採取する草刈り場でした。

佐久間盛政の入城後、百間掘を開削し惣構が築かれ、本町（北国街道沿い）の近江町、安江町などを加え、既にあった南町、堤町、西町が移転し、城の東に材木町を加えました。小立野台地の先端に城が築かれました。

1583 年に前田利家が入城後に天守を築き、大手門前に尾坂下という町割りを配置し、城の東にも大工町などを加え、宝円寺や波着寺という大きな寺院を小立野台の先端に配置しました。大手町の現 KKR ホテルのあたりに、前田長種の屋敷が後から作られるのですが、その前は縦割りの道路がありました。

1590 年代に、石引道を通して石を運び、城郭建設が進み、大身の屋敷を城内に置きました。あらためて惣構を築き、卯辰山麓に八幡宮（現宇多須神社）を造営します。安江村を郊外に移転し、この時に城下町を守る防衛ラインである内惣構と外惣構が一緒に作られたことが最近分かってきました。惣構を発掘してみると、堀は 10ｍの幅があり、土居も幅 10ｍあわせて 20ｍの大きな城壁のようなものでした。

1600 年代は、卯辰山や古寺町に寺院を配し、新丸に大身の屋敷を設け、内外惣構の間に平士と下屋敷を配置しました。

1610 年代は、城中から内惣構の外に大身を配置し、下屋敷を外惣構の外に移しました。加賀国絵図を見ると、犀川の支流を埋め立てて古寺町からお寺を移転したのが寺町の始まりです。このあたりまでに城下町の主要部は形成されています

1620 年代は城下町に大きな変化はなく、1630 年代は寛永の大火が 2 度起き、大火後に大身と町人地の大きな配置換えが実施され、寺院も増えました。大手町尾坂下の町割りは大身の屋敷に転換し、堤町、南町、大工町も移転しました。西外惣構の外に大身の屋敷を移し、卯辰山麓寺院群、寺町寺院群も増加しました。大きな大火を契機として大改造を行い、後の城下町金沢の土台を作った時期になります。

1640 年代は、3 代前田利常が小松に隠居して城下町の建設は停滞します。

1650 年代、利常の死去後、小松衆が帰って馬場町に侍屋敷が配置され、小立野に寺院が増加しました。かなり城下町が大きくなった頃です。

1660 年代は、城下町端部に与力（直臣の身分でも下層の侍）や足軽屋敷を配置し、寛文期の城下町が成立します。

【前半・質疑】

Q. 1990 年から 1600 年の頃に、大手町の尾坂口から枯木橋の間に寺院群があったとされていますが？

A. 大手町に元々寺院群がありました。

Q. 寺院が移転する主な理由は？

A. 古寺町は現在の片町、竪町のあたりですが、藩の政策で移転させられたと思います。

Q. 当時の土地の利用や、配置計画に基づいた

ものでしょうか？

A. 侍も増えていくので、どのような城下町にするか藩の中で考えながら、古寺町のさらに古寺町が大手町のあたりにあり、移転させていったと思います。

Q. 城下町の拡大は、人口増によるものでしょうか、他から人が集まってくることもあるのでしょうか？

A. 侍、町人、周りの村々から城下町に集まってきますし、侍も増やしたでしょう。

Q. 町や寺の移転は、藩が意図的に動かしたのですか？あるいは、それぞれの意志で動いたのですか？

A. 主として藩の政策でしょう。

Q. 藩の中に、都市開発や計画を担う組織があったのでしょうか？

A. 歴史は専門外ですが、そのような組織はあったのでしょう。

Q. 町が移転するということは、住民も移転するのですか？

A. そうですね、村ごと移転させられるわけです。その跡地に武家地が作られました。また大火を契機として、描いていた姿を実現するために大きな配置換えが行われたと思います。

Q. それらは、全国の城下町でみられることでしょうか？

A. 他の城下町のことは分かりませんが、金沢はよく歴史が残っていますし、歴史的な資料だけではなく、城下町時代の道路が残っているので、金沢は歴史を辿りやすいです。

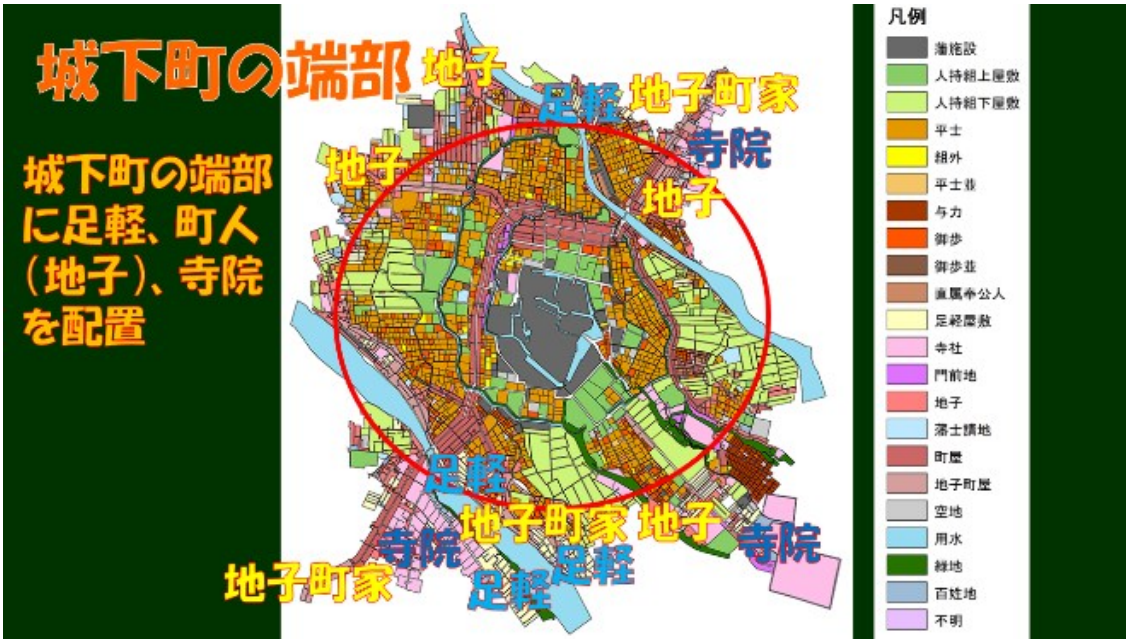
【後半】

寛文期の城下町がどのような内容だったか、あらためて見てみたいと思います。

城を中心として、内惣構の中に人持（上級武士）、内外惣構の間に平士（直臣の侍）、下屋敷（上級武士の家来）は全て外惣構の外側に配置し、中心部ほど身分が高いですが、城を取り巻くように配置しました。

城下町の端部には足軽、地子、寺院をそれぞれ配置しています。足軽は武士階級の中に含みますが、侍ではなく兵卒という扱いです。平士300石（1石＝2俵）に対し下屋敷は100石前後と思いますが、足軽は30俵（＝15石）という身分なので、かなり差がありますから、足軽は内職をしないと食べていけません。

地子とは、町家でも片町、南町、尾張町、東山などの本町（北国街道沿い）の大店の店が並ぶところは、藩から土地を拝領しているので土地税を払わなくてもよいのですが、その他の町人は地子銀という税金を取られます。身分を藩から認められている地子町家と藩からも町人として認められていない地子が周辺部に位置しているということになります。

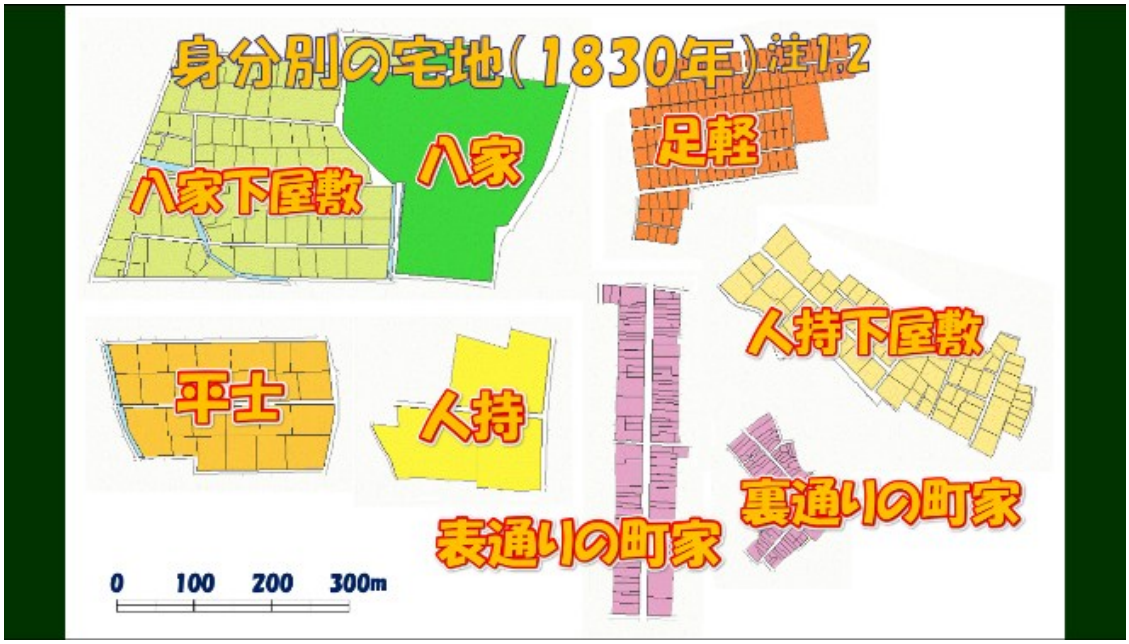


その後、城下町は少し拡大しますが基本的に寛文期の構成を保っています。

文政期（1830 年）には八家が出てきます。屋敷の数を身分別に数えてみると、侍が約 4,000 戸（人持・60 戸＋平士 1900 戸＋陪臣 1900 戸）、足軽が約 2,800 戸、町人が約 16,000 戸、寺院が 230 戸です。町人は本町、地子町、地子ということで城下町に商業、職人としての役割がありました。全て合わせて 22,600 戸の宅地を数えることができます。当時の家族構成より人口は 12 万人くらいだったと推測されます。

身分別の宅地規模をみると、平均して八家は平均 8000 坪、人持が約 2000 坪、平士が約 300 坪、足軽が約 70 坪、町人が約 40 坪です。八家の下屋敷は 170 坪で平士よりも小さく、人持の下屋敷が 148 坪です。

城から惣構を経て遠ざかる程、宅地が小規模になります。町場でも現在の東山の旧森下町から木町一番町、二番町、三番町と通りから裏になるにつれ段々と奥行きが浅くなりますし、間口も表通りの旧森下町から裏通りになるにしたがって狭くなります。



金沢でまち歩きをすると、迷路性を感じることができます。観光客の方も裏通りを歩くと、迷子になる方もあるかもしれませんね。迷路の状態も歴史的環境として貴重なものと思いますが、従来の説ですと、敵兵を攪乱させるために迷路状態に城下町をつくったと言われています。

また、台地、河川、段丘や用水など自然地形により屈曲や変則の複雑な街路網になっています。段丘に沿って屋敷割（宅地割）をしなければならないので、自然の地形に左右されますから、意図せずとも複雑な街路になります。城下町の街路網は、そのほとんどが今も残っています。

八家は長大な書院造が連なる長家の屋敷絵に八家屋敷の姿をしのぶことができます。人持の屋敷としては、唐破風の大きな玄関を構えた津田玄蕃邸が残っています。侍屋敷は、門を構え土塀を巡らして庭木を繁らせ、梁組の屋根妻を表へ向けます。足軽屋敷は、生垣を巡らした前庭を備え、梁組の屋根妻を表へ向けます。

町家は低い二階の両端に袖卯建を付け、通りに向けて店を連ねていました。大正期から昭和戦前期へ、中町家から高町家へと二階が高くなります。

近代になると、広い武家地は細分化され、給与所得層が新たに居住しました。旧武家地は明治以降に路地を通し、土地が割られるようになり、さらに迷路性が高まりました。武士に憧れた給与所得層は、アズマダチ風に梁組を表に向けた二階建の武士系住宅を建てました。大正の終わりころから入母屋の屋根になります。

金澤町家も年々減少していますが、金沢にとって大事な歴史をあらためて痛感するところです

【後半・全体質疑応答】

Q. 間口の広さで課税といわれますが、本町（北国街道沿い）も課税されていたのでしょうか？

A. 本町は拝領地のため課税はありません。地子町家と地子に対して課税されていました。

Q. 間口と奥行きについて比較を見せていただきましたが、絵図そのものはどのくらい正確でしょう？

A. 旧森下町、木町の絵図を示しましたが、明治 9 年の金沢市街分間絵図というもので、土地の税金を徴収するために測定した正確なものです。

Q. 屋根葺き材について教えてください

A. 人持の場合はこけら葺きで、侍、足軽、町人は板葺きの石置き屋根です。

金沢城は鉛瓦が使われましたが、当時の瓦は越前から越前瓦を取り寄せ、それはおそらく高価なもので、城の中で越前瓦も使われていました。侍や町家の大店の場合、土蔵は防火構造にしているので、越前瓦を乗せています。その頃の越前瓦には釉薬が塗られていないので、冬の寒さで瓦が割れてしまい長持ちしないので、瓦は基本的には使われなかったと思います。昭和 7 年頃に黒い釉薬瓦が開発され、石置き屋根が一斉に瓦屋根に変わったと聞いています。

Q. 寺院に瓦は使われていましたか？

A. 瓦は長持ちしないので、寺院も石置き屋根だったという記録も残っています。

Q. 江戸期の茶屋街に「いぬやらい」はあったのでしょうか？

A. 今も金沢の茶屋街にいぬやらいはありません、歴史的に見ても犬やらいは金沢では使わなかったと思います。

講座の様子

講師の
増田達男先生